

KODAK Color Control Patches

© The Tiffen Company, 2000

Kodak
LICENSED PRODUCT

Black

3/Color

White

Magenta

Red

Yellow

Green

Cyan

Blue

ア
ル
ス
刊

北
原
白
秋
著

一
九
二
二
年
版

詩
集

観
お
の
情

10

15

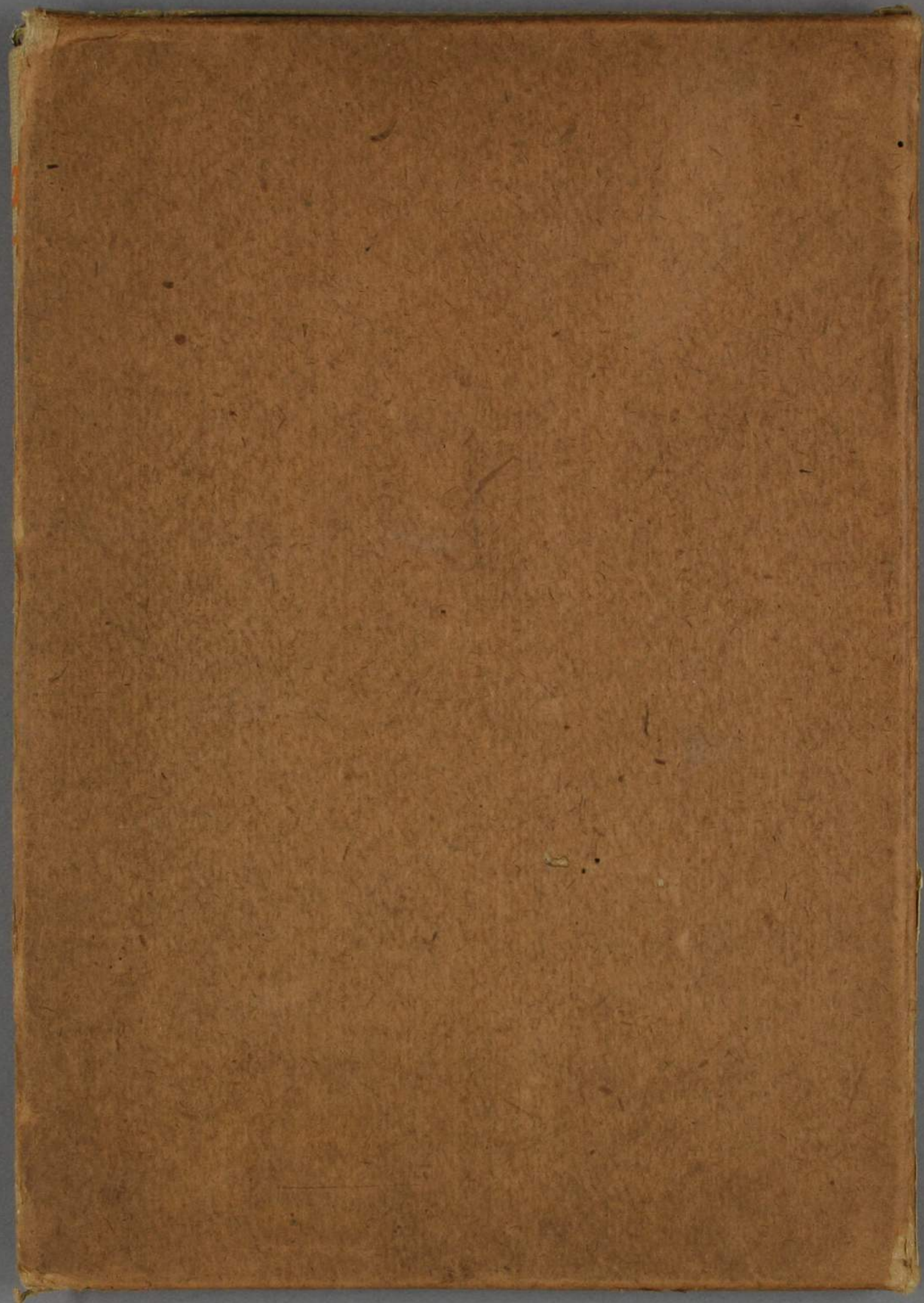
20

25

観おの状

はり

きりおの状



KODAK Color Control Patches

© The Tiffen Company, 2000

Kodak
LICENSED PRODUCT

Blue

Cyan

Green

Yellow

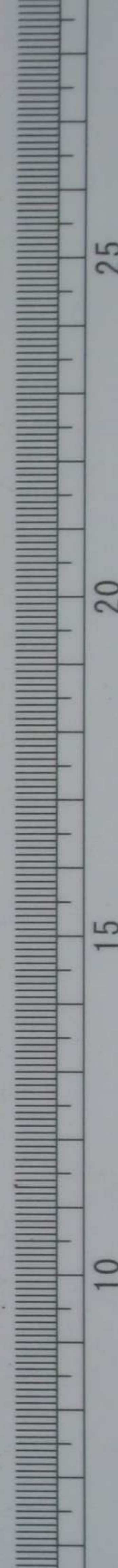
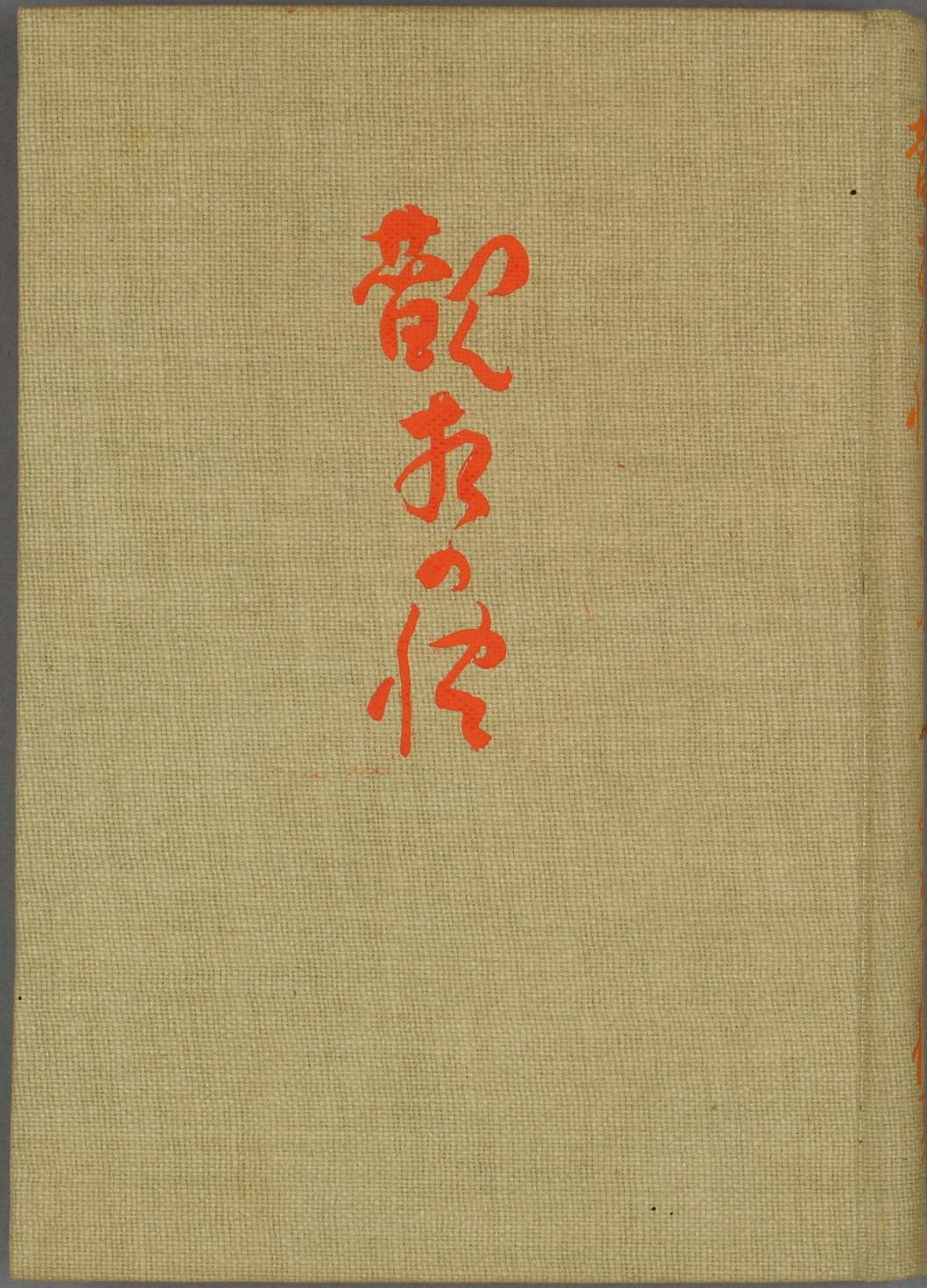
Red

Magenta

White

3/Color

Black



10

15

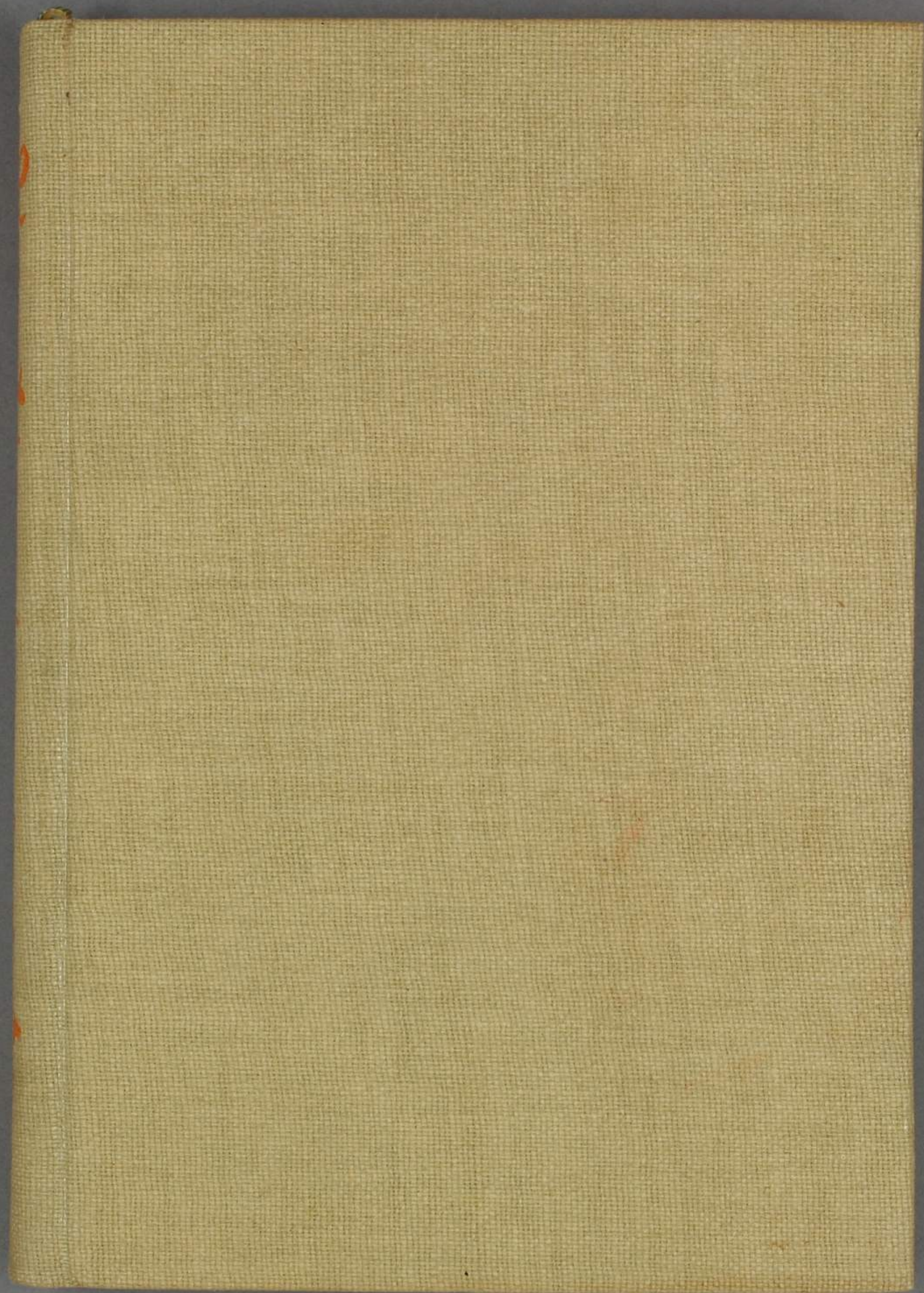
20

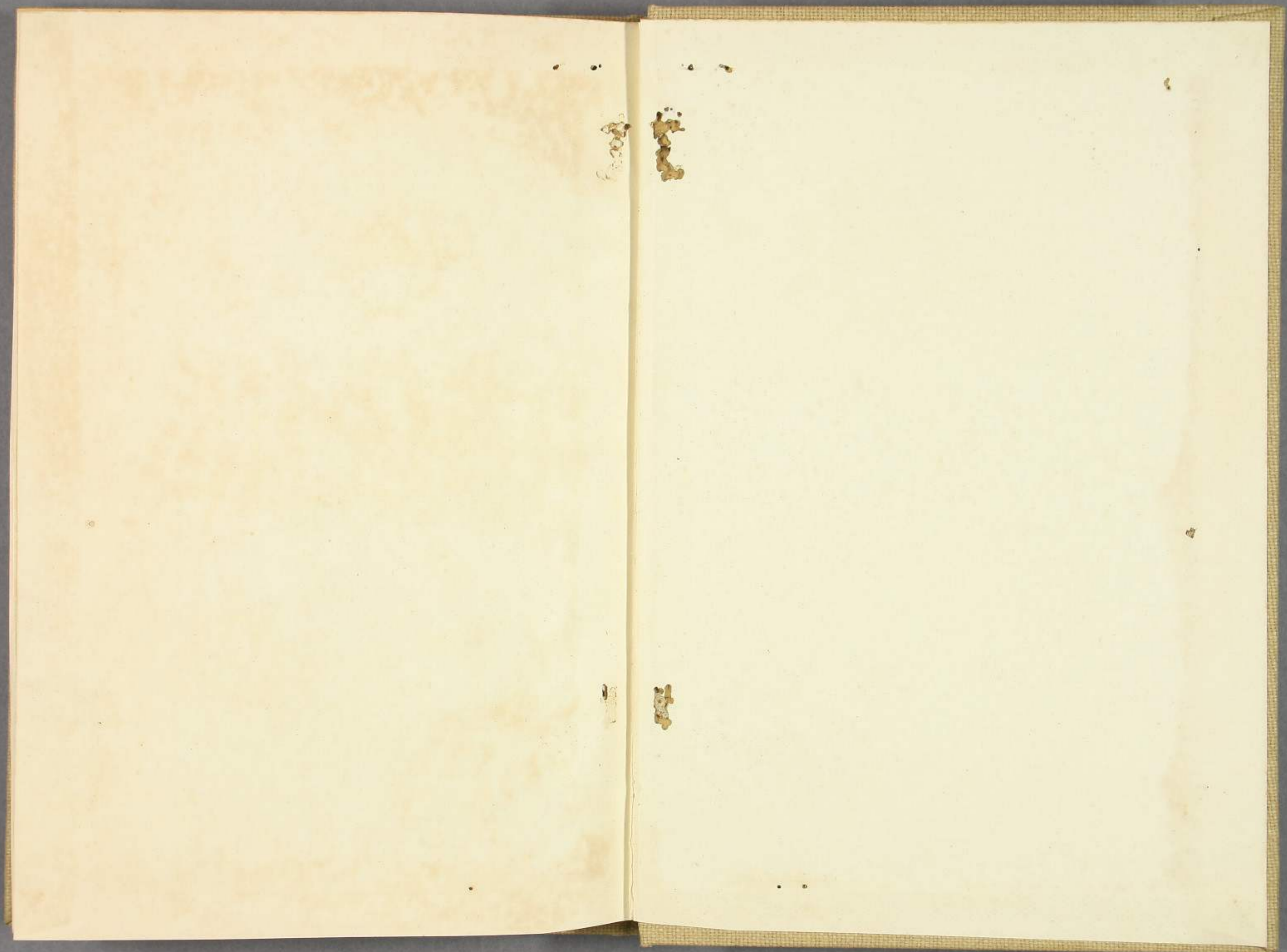
25

観音の経

法界

妙法蓮華經





音おの怪

觀おの怪

観おの依

はらふ

小、ろ子と依暮

序

虚と實とは裏と表である。實にして虚、虚にして實なるが故に尊い。何れは先づ實相のまことを觀、觀て、深く到り得て、更に高く離れむ事をわたくしは願つてゐる。

實相に新舊のけぢめは無い。常に正しく新らしいからである。これを舊しとなすは觀て馴れ過ぎたからである。一時の流行は時とともに滅びる。而も人はただ新奇を奔り求める事に於てのみ、その詩境を進め得るものと思つてゐる。然し何ぞ知らむ。此の東に於てひたすら彼の西の舊を趁うて新らし

と成す秋に、却て西に於ては此の東方に道を求める事が常に新風發生の素因を成してゐる。かうなると何が新らしいかと思はせられる。

再び云ふ。實相のまことこそ常に正しく新らしいものである。いつ觀てもまことなる事に於て渝りは無い。芭蕉の説いた不易はこの永生の流に通ずるまことの詩の精神である。詩の正風はさうした精神に根柢を置く。この精神は殊に我が東洋藝術の眞髓と成すところのものである。

此の集の詩もおそらくは今人の眼に舊しとせられるであらう。それでわたくしはいいのである。詩境の高さは觀相その

ものの高さに由る。氣品は巧みて得らるるもので無い。その人のおのづからなる圓光である。だからわたくしは所謂新奇に浮かれて飽かざる事よりも詩のまことの大道をただ一筋に修めて行けばいいのである。

此の集には詩文（私は散文詩なる翻譯語を好まない。）と長歌體の詩篇とを收めた。詩文には口語脈と雅文脈との二種がある。何れも純粹の意味に於ける詩として書き下ろしたので無い。私にとつてはこれらは矢張り詩文であると遜る方がほんたうである。一方にまた長歌體を選んだのはさう成る可き内容だつたからである。長歌は萬葉に由來するが、わたくし

四
のものは萬葉のそれとも違ふ。わたくしの詩の内容にその形式を採つたのである。此の形式のすぐれたところはかの絃樂の如く絶えんとして続き、続きつつ縹緲としてまた絶えんとする一流れのリズムの起き伏しにある。ことさらに行を別けず其まま書き下したのもその故である。兎角、日本のものはかういふ風にしせんに書き下すのがほんたうのやうである。わたくしはまた、この頃流行の自由詩の殆ど多くを眞の詩とも自由詩とも思つてゐない。どう考へても行を別けただけの散文で、すぐれた或る種の文章よりもつと弛緩したリズムの、而も粗雑な思想の概念をただ放恣に非音樂的に述べた

に過ぎぬと思つてゐる。

詩は詩である。詩に重んず可きはその高い精神である、韻律である、香氣である、氣韻である。

大正十一年六月

小田原にて

白 秋 識

觀相の秋目次

序

その一

簡素な庭

ある人の庭……………

五

紅葉を焚いて……………

二〇

山中消息……………

一六

その二

一

秋山の歌

黎明の不盡……………二七

遠山脈の歌……………三三

湯どころの秋……………三五

秋山の歌……………三七

孟宗と月

竹と曼珠沙華……………四四

竹の林の歌……………四四

蝸の歌……………四五

岡の鉾杉……………四七
樵と栗……………四九
孟宗と月……………五二
荒浪千鳥の歌……………五五

冬の山岨

冬の山岨……………六一

冬の日棚田……………六四

落葉行……………六六

落葉吟……………六六

竹林の早春

四

水仙と菊……………三

聴けよ妻ふるもののあり……………三

元旦の夜のこと……………六

路の臺……………八

竹林の早春……………八

ころころ蛙の歌……………三

立枯並木の歌

立枯並木の歌……………九

潮來の入江……………九

夜の雪……………三

鳥の啼くころ……………四

米の白玉

アツシジの聖の歌……………七

米の白玉……………一〇

犬と鴉……………一六

童と母

麻布山……………二

五

童と母 六

その三

ほのかなるもの

ほのかなるもの 一九

191

心簡素不馳

1001

古風の庭

大正十年秋、上州富岡某氏別荘にて

紅葉を焚いて

同七年秋、名古屋月見坂にて

山中消息

同七年冬、小田原傳肇寺にて

ある人の庭

寂しい庭だ、閑かな庭、古めかしい日本の庭、風雅な庭、それでも極りきつた、強ひて取澄した庭、幽かな庭。

さびしいが陽はあたたつてゐる。すべてが穏かな秋の半ばの明るさだ。輝きの無い輝き。物音の無い、人の氣も無い庭、森閑とした庭、幽かな庭。

誰がこさへたものか、とにかく昔風の茶人好みの庭、何の自然も無いのに、形は心を寫してゐる。こさへた人もさみしかつたか、心がそのまま現れてる。それが古びていつのまか、おのづと自然な眺めに寂びた。俳畫の庭、幽かな庭。

六

日は午すこし過ぎ、空は高いが、何處からとなく、薄らした雲の層が、白くよどむで來ては掻き消えてゆく。築山の羅漢柏、枝ぶりの蜷つた松、ばらばらの寒竹、苔蒸した岩、瓢箪形の池の飛石、汀の小亭、取りあつめて、そのまま一つの象になつてる。動きの無い庭、幽かな庭。

濁つた池の面は錆び果てて、何の色香も無い庭だが、隅この小さな石橋の蔭には、破れ残つた蓮の浮葉が二つか三つ、下のあはれなすがれ葉には、時おくれの精靈蜻蛉が休んでゐる。その蜻蛉の透きとほつた赤い翅だけか、光つてゐるといへば光つてゐる、たつたそれだけのことだ。そよとの風も無い庭、しづまり返つた庭、幽かな庭。

あまりにかけ離れた、世間の外の氣疎い庭。時には池水の深い底から、しんしんと何かが溢れて來て、ともすると冴えた輪波を擴がらせるが、それもまた何の手應へも無く、心に還

七

つて了ふ。と、蜻蛉もついと立つて、まだあちらこちらと、
留り留り、それも、あるかなしにそこらを揺り醒まして、何
處かしらへゐなくなる。それつきり、ほんの一寸との果敢な
い動き。聲も無い庭、幽かな庭。

八

それでも陽はあたつてゐる。すべての影が池の面おもてにある。ひ
とつひとつに光りもせねば、そよぎもせず、影は影とわかれ、
濃淡をつけ、同じところにやはり同じ姿を落したままで、そ
れでそのまま日の暮の朧ろのかげりを待つばかりだ。どうに
もならないさびしい庭、深い氣配ひばいの庭、幽かな庭。

鶺鴒が来た。おや、ひんこつひんこつとやつてゐる。やや寒
うなりかけた小亭ちんの、反そりかへつた小屋根の端はしで、いくら振
つても振つても、黄色い尻尾は、いよいよ切ない刻みを早め
るばかりだ。何時まで経つてもをさまり返つた庭、さみしい
庭、さびしいさびしい幽かな庭。

九

紅葉を焚いて

紅葉して来た。庭の楓が紅葉して来た。紅葉ばかりになつて了うた。障子を開けて、つくづくと眺めてみると、かうまで楓の多い庭だつたかと、今更に驚かされる。私も妻も二人とも、その楓の中の一つ家に、今まで居たかと驚かれる。今朝はまた殊更に、紅葉の光澤がよう冴えて、小松の傍の楓など、明るいほどに紅く透いてる。まだ黄色い下葉や裏葉、あれも

程なく枯れるであらう。ああ、秋もふけたと見てゐるうちに、もう褪せかけて、風もないのにはらはらと散る紅葉もある。それも寂しい私達には恰度程よい寂しさだ。簡素な紅葉、静かな紅葉、その紅葉の下枝には、雀も二羽来て啼いてゐる。寒い朝ゆゑ、それは冷めたい囁りだ。二羽でも雀も寂しからう、紅葉ばかりで、と思うとまた、私達の寂しい旅の姿がかへり見らるる。紅葉して来た。庭の楓も紅葉して来た。紅葉ばかりになつて了うた。

紅葉して来た。庭の楓が紅葉して来た。紅葉ばかりになつて

了うた。寒くなつたと私が云へば、妻も左様で御座います、寒い朝でと袖を合せる。旅の事ゆゑ、なほさら寒さも染みである。さうはいふものの、たとへ二十日でも住み馴れて見ると、この離家が何とはなしに古びて来て、矢つ張り二人の住居らしい。二人もどうやら落ちついて来た。紅葉でも焚いて見ようかと、私が云へば、妻も素直に、焚いて見ませう、寂しいからと庭に下り立つ。竹の箒で私が掃けば、蹲んで妻が拾ひ集める。かさこそと、落葉と落葉が擦れ合うて、それを二人で集めてゐれば、今はもう秋も限りと思はれる。遠州風の濡れ石の上、枯れた芝生の凹みなどに、落葉は一入哀れ

深うて、土の濕りもにじみ過ぎてゐる。紅葉して来た。庭の楓も紅葉して来た。紅葉ばかりになつて了うた。

煙が立つ。煙が立つ。庭の楓の紅葉の蔭から、煙が立つ。紅葉を焚いて、ふすふすと白うくすぼる煙のかげで、温かいぞと私が蹲めば、妻も双手をかざして蹲む。青い枳殻の小枝などまた折りくべて、長い感冒であつたと私が云へば、私もどうやら感冒氣でと、妻もわびしい。大切におし、旅で病んでは心細い、私も今度は頼りなかつたと、私も紅葉をまた火にくべる。ほんとにね、それでも早うお癒りになつてよかつた

と、妻もまた紅葉をくべる。それもみなお前のお蔭だ、よく来て呉れた、難有かつたと、しみじみ、私は煙に噎せる。いえと妻も、向うへ立つて、紅い紅葉を拾うて来る。早う歸らう、お前がまた病氣にならぬうちにと云へば、ほんとに早く歸りませう、何と云つても自分の家がいちばんいい、旅は寂しい、心細い。殊にここらは霜が深うて、もう雪にでもなりさうなど、一きは赤く火を吹き立てる。煙が立つ。煙が立つ。紅い楓の葉蔭から煙が立つた。

紅葉して来た。庭の楓が紅葉して来た。紅葉ばかりになつて

了うた。旅に来て長らく病んだが、心細いものだ。俳諧の聖芭蕉でさへも、旅に病んでは寂しかったか、夢は枯野をかけた廻ると、云うたではないか。お互ひに大切に^{大切に}する事だ、愛惜^{愛惜}い物は命だと、私が云へば、妻も寂しく笑つて噎せた。いい煙だ、寂しい紅い紅葉だ、せめてもう少し温まつてと、紅葉を焚いて、枝の紅葉ももう末かと仰いで見れば、はらはらとまた滾^滾れてくる。もういい、もういい、いい程に焚いて朝飯にしませう。煙が立つ。煙が立つ。紅い楓の葉蔭から煙が立つた。

山中消息

寂しいものは山の住居だと人もいふ。人里を少しでも離れると、けつく氣樂なと思はぬでもないが、さりとて、人に逢はねばやつぱし寂しいものだ。たまさか通りがかりの人聲の、小荷駄馬でも曳き、蓆でも着て、裏の山路を、えつちやほう、はいしとうとうと吐りながらに上り下りする、耳につき、つい目につくのも心丈夫な思ひがする。いよいよ死にました、

小さい赤んぼでございましたと、小さい棺をかついで来てさへなほさらだ。生きとし生ける鴈や百舌、鶉のたぐひ、木々の枯葉に驚く聲も、けけつちやう、ちやうちやう、きいきいりいと親まる。

空は晴れても、冬は日あしが短うて、いつとなく黄ばみかけると、早くも夕焼方の風向となる。縁に出て、ぼつねんと眺めてゐると、何ともないやうでゐて心ぼそさが身に染みる。傾いた萱屋根の山門も、向うに見えて、其處から續いた一筋道の、此方はさらに奥ぶかくて、雀のお宿とでも云ひさうな、

これが私の住居かと思へば、堪へられぬ。朽ちてた外柱には、日あたりがよくてか、霸王樹や龍舌蘭など匍ひ絡んではゐるものの、掛け忘られた数珠の緒の二くさり三くさり、もうぼろぼろに腐れかけてる。これが佛のゐられる寺だ。

寒々と揺れてゐるものは、孟宗のほづえ、ささ栗のそばの榎の木、枯枝の桐の苔、墓原の香のけむり。井戸端の紅い山茶花は散りつくして、昨日咲いた庭の白薔薇だけが新らしかつたが、今朝人が来て切つて了つた。ところどころに白い萱の穂もそよげば、一羽の白い鶏でさへ、吹かれどほしで消えも

やらぬ。それは寂しい揺れ方だ。

遠々に消えてゆくものは雀のかけ、冬陽の名残、時雨も幽かにわたつてゆくが、ともすると、いつのまにやら雪になつてる。函根あたりは猶さらだ、白い白い雪の野山だ。

簡素だと思へば簡素、寂しいと云へば寂しい。一人でゐてもゐられるものの、なまじ、二人で慰め顔に、エネチアまがひの古い洋燈など點して見るので悲しくなる。

人は人、どうせ私は私だと思つて見ても、その人ごとが忘れられぬので、便りも待つ、いちらしくもなれば腹も立つ。郵便くばりにも番茶の一つもほうじて出す。それかと云うて、その日その日の新聞紙でさへ、日が暮れてからやつと着くのでよくは讀めず。夜はひとしほ波の音までが聞えるゆる、明日の日和なぞ氣にかかつて、月の光が白い障子に射すまでは、雨戸も閉めねば、寝ねもせず。

夜が夜中、厠に立てば、裏の山には月が澄んで、畑の葱さへ一つ一つに眞青だ。虫ももう鳴かぬが、それだけ凄い。首を

竦めて、咳く時の寒さと云へばまた格別だ。せめて風邪でもひかぬやうにと、頸巻なぞして、手水つかへば水も凍つた。

かうした私のこの頃です。

その二

傳
い
の
歌
人

黎明の不盡外二篇

望山脈の歌

大正十年秋、妻菊子とともに御殿場を経て伊豆
吉奈温泉に行く、その時の詩。
大正十年秋、上州富岡にて。

黎明の不盡

天地の闢けしはじめ、成り成れる不盡の高嶺は、白妙の奇し
き高嶺、駿河甲斐二國かけて、八面に裾張りひろげ、裾廣に
根ざし固めて、常久に雪かつぐ峰、かくそそり聳やきぬれば、
厳しくも正しき容、譬ふるに物なき姿、いにしへもかくや神
さび、神ながら今に古りけむ。たまたまに我や旅行き、行き
なづみ振りさけ見れば、妻と来てつつしみ仰けば、あなかし

こ照る日もわかず、暮れゆけば雲巻き蔽ひ、霹靂はためくさへに、稻光青の火柱、火ばしらの飛ぶ火のただち、また、とどろ電ぞ飛びたる。御殿場のここの驛路、一夜寝て午夜ふけぬれば、まだ深き戶外の闇に、早や日ざめ獵犬が群、勢ひ起き鎖曳きわき、跳り立ち啼き立ち急ぐに、朝獵の公達か、あな、ひとしきり飛び連れ下りる騒ぎの、さて出立つらむ。けたたましく自動車の鳴り爆せる音、咽喉太の唸り笛さへ、凝り霜の夜凝りに冴えて、はた、ましぐらに何處へか駈け去り去りぬ。底冷えの戸の隙間風、さるにても明け近からし。目のさめて明告鳥の息長に啼き呼ばふ聲、そことなく應ふる

聲の、裾野原揺りどよますに、おのづ覚め我は在りけり、目はさめて我もありけり。つくづくと首延し見れば、こちごちの濃霧のなびき、溪の森、端山の小巖、黒ぐるとまた氣ぶかきに、びようびようと猛ける遠吠、をりからの曉闇を續け射つ速弾の音。たださへも益良夫ごころ溢れ揺り抑へもあへぬを、見透かせば渦巻く霧の璃瑠雲の漂ひが上、數かざりなき糠星の瓔珞の中、あなあはれ不盡の高嶺ぞ、今し今、一きは清き紫の朝よそほひに出で立ち立てれ。夢か、こは、まこととなりけり。夢ならず、現なりけり。起きよ起きよ。まことこれ日の本の不盡、木花咲耶姫の神、神しづまりに鎮まらす不

盡の御嶽ぞ、見よ目に見えて近ぢかと明け初むるなれ。起きよとて妻揺りたたき、目ざめよとまた呼び覺まし、口漱ぎ、さて、身をきよめ、さむざむと袂合はし、しみじみと二人い寄り、ひたすらにかくて見惚れぬ。時ありぬ。やや時経れば、ほのぼのとして薄明る山際のいろ、黎明の薄樺いろに焼け明るその静けさに、日出づる前か、明鴉かをかと二羽連れだちて羽風切る、その羽裏いよよ染みたり。はたはたと山鳩もまた二羽競ひ行く。観る人も妻とし見れば、飛ぶ鳥も連るるものかも、うれしやと妻は見て云ふ、我もまた微笑みて見つ。さるからに、薄紅き蓮華の不盡の隈ぐまの澄み明りゆく立姿、

頂の邊は更にも紅く、つや紅く光り出でたれ。よく見ればその空高く、かすかにも靡くものあり。高うして吹雪すらしか、かすかにも雪煙り立ち、その煙絶えずなびけり。いよいよに紅く紅く、ひようひようと立ちのぼる雪の燿の天路さしいよよ盡させね、消えてつづき、消えてつづけり。あなあはれ、かのいつくしき、このかうかうしき。眺むれど見れども飽かず、言にさへ筆にさへ出ね。あなかしこ、不盡の高嶺は日の本の鎮めの高嶺、神ながら奇しき高嶺、この高嶺まれに仰ぎてこの朝新にぞ見て、この我や、ただこの妻と、ただ得も云へず涙しながる。

遠山脈の歌

三三

上つ毛の加牟良の北に天そそる妙義荒船、遙ばろと眺めに出れば、この日暮ふりさけ見れば、い、遠し遠き山脈、いや高し高き山脈、いやが上に空に續きて、いや寒く襜を重ねて、幾重ね、幾疊り、末途に雲居にぞ入る。かりそめの旅にはあれど、夕されば内にも堪へず、外に出でてひとり在りけり。向ひ吹く川の瀬の風、川風の吹き凍えに、我が向ひ辿る高

崖、遙か見る北の山脈。冬も早や絹のつや雲、卷雲の卷きのなびきに、氷凝り雲層雲の群、重ね雲、寂び金の雲、下明り雲ともわかす、薄ざらひ山ともわかす、たださへも現ならぬを、たださへも果てしわかぬを、日の射すか末廣の虹、幾すぢが透きて落せり。かうがうしその薄光、寂び寂びしプラチナのすぢ、濃き淡き峰の疊みに、引きちがふ山の小襪に、また雨と和み注げり、柔かき金色の霧、あな遠し遠き山脈、あな高し高き山脈、立ちとまり見れども消えず、目ふたぎて傷めど盡きず、目翳げして遙けみ見れば、いや寂し薄き陽の虹、また見ればさらに彼方に、いや高き連山の雪、いや遠き連山

三三

の雪、ひえびえと、つぎつぎと、續きつづきて輝きいでぬ。

三四

湯どころの秋

ねもごろの日のあたりかも。そことなき湯のけぶりかも。日
のあたる原のかたへに櫛立ち、櫛の傍そばに斑牛まだらしひとり居りけり。
安らかに繫がれてけり。山峽の湯どころの秋、出て見れば下
の小橋を、杖つきて渡る子もあり。垂稻の黄ばむ田づらは、
をりふしに雀むれ立ち、道ぞひの茅屋の庭に、白菊の盛り見
せたる、胡麻と粟並べ干したる、暇ある心に見れば、なかな

三五

かに今日は安けし。向つべに日のかげる山、なほ明く温かき
山、その空の白き綿雲、ちろちろと禽渡るさへ、なかなか
あはれとも見れ。妻と来て二人来て、七日まり住み馴れての
ち、やうやうに紅葉色づく遠近たつこの、この眺めなる。あなあは
れ、ねもごろの日のあたりかも、そことなき湯のけぶりかも。
目のあたる原のかたへに櫛立ち、櫛のかげに斑牛ひとり居り
けり。繫がれてただねんねんと草食みにけり。

秋山の歌

秋山のなぞへの薄うす、ひとつらね揺りかがやけり。秋山の名も
無き山の、草山の、山の端薄、その穂の薄、揺りかがやけり。
この夕、出でて見て、向ひ見て、丸木橋妻とわたりて、また
見れば、まだかがやけり。その薄刈る人もあり、また負ひて
降り来るもあり。下り来て、行きすぎざまに、さわさわと背そび
見せゆく、さわさわの背の薄、またかがやけり。雲白くうか

三八
べる峽の日屯ひたつらの空間そらあひの中うち、こまごまと飛べる羽蟲も、よく見
れば一つ一つに、命あり、舞ひ立ち光る。閑しづかなり、ただ安
らなり。まだ深き日のあたりなる。暑からず、寒くしもなく、
まだ温ぬき日のかげりなる。湯どころのうしろの山の、秋山の、
その柔かき草山の、このもかのもにさわさわと音する薄、穂
薄の、今日来て見れば、揺りかがやけり。あなあはれ、我も
見て、妻も出て、二人ながむるさわさわ薄、そのさわさわ薄。

こまごまと飛べる羽蟲と月

凡て、大正十年秋の木兎の家の生活より

竹と曼珠沙華

わが門かどの竹の林に、曼珠沙華赤く咲きたり。竹の根の一つ一つに、この華はなや六つ七つづつ、日に増しに数かさみゆく。怪しくも赤き卷髭、髭細の蓮華はななす華、咲き盛るその華見れば、おのづから秋も澄みけり。いよいよに風も寂びけり。隣り寺、寺の古墓、日あたりは未まだも暑けど、墓掃くとかがむ影すら、闕伽あ汲むと寄るすらも無し。あなあはれ、摩訶曼珠沙華、出

四二
で入るとひとり眺めて、時をりは妻と眺めて、昨日よりいよ
よ殖えしと、まだ今日も赤しとぞ見る。孟宗のしだれ笹ゆゑ、
陽は射せどいぶせき藪を、常くぐり我は在りけり。わびしけ
ど遊び馴れけり。山住の心安さは、藪越しに浪の音聴き、里
囃子うれしとも聴け、施餓鬼過ぎ流石さびしく、人訪はぬ今
は堪へえね、また出でて竹の根見れば、曼珠沙華赤く赤きに、
ちらと向き、釣眼野狐、うしろ向き尖り口して、小藪吹き、
吹き吹く風に、日の暮に、あな、飛び飛びて消えつつ失せぬ。

竹の林の歌

わが宿の竹の林に、夕あかりかがよふ見れば、その竹の濕る
根ごとに、何か散り、深く光れり。その節のひとつひとつに、
何かまた留り光れり。その笹のさみどりの葉に、何かまた揺
れて光れり。金色のその光るもの、こまごまと眼に染みるも
の、雨ふりてあかれるのちは、とりわけて揺れてうつくし。
寂しくて見てゐるきはは、いよいよに消えてうつくし。揺る

四四
るともただ見て居らむ、消ゆるともまた見て居らむ、堪へ堪へて日の暮るるまで、なほなほに寂しがりつつ。わがやどの竹の林の夕あかり、裏山松の松風の音のこなたに。

蝟の歌

蝟かたかなの啼なき連るるなり、二つなり、啼なき連るるなり。その二つ啼なきやめばまた、こなたより啼なきしきるなり、ただ一つ啼なきしきるなり。孟宗の片日射なり、山松の遠日射なり。かなたには輝りきらふ海、こなたにはわたる山霧、山ざりに山の施餓鬼のほとほとに果つる頃なり。金色こんじきに秋の日射の斜なし澄みとほる中、蝟かたかなは啼なきしきるなり、急せき急せきて啼なき刻むなり、

二つ啼き、一つ啼き、また、こもごもに啼き速むなり。

四六

俳句

蛸が二つ啼きまた一つがこもごもに

岡の鉾杉

わが宿の岡のなぞへに、杉いくつ屯せりけり、せうせうと屯せりけり。鉾杉のひとむら木立、鉾杉の鉾を並べて、この朝明しぐるる見れば、霧ふかく時雨るる見れば、うち霧らひ、霧立つ空に、いや黒くその秀うかび、いや重く下べ鎮もり、いや古く並び鎮もる、凡てこれ墨の繪の杉、見るからに寒し嚴かし、かうがうし寂し崇高し。あなあはれ岡の鉾杉、をち

四七

こちの小竹のむら笹、柿もみち、梅が枝の蔦、とりどりに色に出づれど、神無月すゑの時雨に濡れ濡れて、その葉枯れず、落葉せず、透かす、薄れず、ただ上へわづか赭みて天鷲絨の焦茶いろすれ、深ぶかと黒くか青く、常久に古び鎮もる。寂しくも寂しき姿、堪へ堪へて常立つ心。あなあはれ冬の鉾杉、海ちかき岡の鉾杉、鉾杉の渦成す霧に、涯知れぬ海も見わかず、ひさかたの空もえわかね、時をりは、渡りの鳥のはぐれ鳥ちりちりと落ち、羽重の一羽鴉も飛びなづみ、ややに來て揺る。あなあはれ雨の鉾杉、見てあれば幽かに揺れて、ふる雨に幽かに揺れて、ただせうせうと音たてにけり。

榧と栗

傳肇寺、小さき古寺、この寺の山の墓場に榧と栗並び立ちたり。並びたちともに老いたり。榧の木は栗の木のそば、栗の木は榧のかたへに、さびさびてすでに老いたり。その榧よいつよりか老い、この栗よいつよりか立つ。榧と栗さびにさびつれ、なほし未だ花は咲きけり、年ごとに花はつけけり。榧の木はかすかなる花、栗の木は露はなる花、その榧に小さき

榧の實、この栗に栗の青毬、風吹けば實さへ毬さへ、またい
 つかこぼれこぼれぬ、枯れ枯れて土にかへりぬ。見る人も知
 る人もなし。寺まうで墓まうでびと、たまさかに蹲み通れど、
 誰ひとり振り仰がず、誰ひとり眼にもとめねば、ただ二木
 立てるのみなる、榧と栗さびるのみなる。あなあはれ、榧と
 栗の木、落葉する栗も寒けど、常青く立てる榧の木、冬の口
 はことに高しよ。栗の木はいよよ透けれど、榧の木はいよよ
 か黒く、薄日射函根の入陽秀に受けてひとり尖れり、いや黒
 くひとり堪へたり。雨まじり寒ふる日も、風まじり雪の飛ぶ
 夜も、こごしくも凍え立ちたり。親しくも立ちて堪へたり。

あなあはれ老木の二木、親しくも並ぶ姿の、寂しくも隣り合
 ふ木の、頼り無き二木を見れば涙しながる。

孟宗と月

さわさわと揺るるものあり。午夜ふけて揺るるものあり。わが窓の硝子戸の外、眞透かせば月に影して凍え雲絶えず走れり。圓かなる望月ながら、生蒼く隈する月の、傾けばいよよ薄きを、あな寒や揺るる竹あり。孟宗の重きしだれの重なりその上に抜けて、ただひとり揺るる秀のあり。目か醒めし、夜風が出でし、さわさわと揺れて遊べり。しだれつつ前にう

しろに、照りかぎり揺れて遊べり。圓かなる望月ながら、生蒼く隈する月の飛び雲の叢雲が間、ふと洩れて時をり急に明るかと思ふ時なり。目に見えてさわさわと、照り浮ぶ孟宗の、あな、一きは強き狐光のその月に、さながら生きて踊るかに、近明りして、勢ひ舞ふ、かと思ればまた、何か暗く薄かがりして、揺らぎ止み、揺らぎ騒立つ。この夜さや、夜鳥も啼かず、藪かげの隣の寺もしんしんと雨戸鎖したれ。時として川瀬の音の浪の音と響き添ふのみ。それもただ遠し、氣疎し。あなあはれ、この夜の山に、何しらす目のさめしもの、我のみか、揺れそよぐあり。揺れそよぎ、獨り遊ぶと、

揺れそよぎこの目の外まに、またさわさわと音立ててゐる。

五四

荒浪千鳥の歌

磯長いそながの小こゆるぎの濱、この濱や荒浪高し。この夜ごろいよいよ高し。時し化つづき西風強く、夜は絶えて漁火いさなすら見ね、をりをりに雨さへ走り、稻妻いなづまの青あおの映うつりに、鍵形かぎがたの火の枝えだの棘いばらひらひらと鋭き光なす。そのただちとどろく巻波まきなみ。時として雹あられさへ飛ぶに、なにぞ何なにぞ亂るる鳥は、なにぞ何なにぞ散り散る鳥は。目に見れば数かぎりなく、聲きけは消けなば消けぬかに、

五五

へうへうと連れ啼く鳥の、百千鳥、荒浪千鳥。荒浪の穂立ほだちの空を、とまるすべ、寝るすべ知らに、ただ飛びて散り散る千鳥。この海や涯はたし知られね、この荒れやはかり知られね、初夜過ぎて、また後夜かけて、闇ふかく翼はねふる千鳥、この雨を、また稻妻を、ひた濡れてかがやく千鳥。ある聲は遠くはぐれて、ある群は斜め亂れて、また或るは陸くわの方向き、また或るはちりちりと退ひき、すれすれに或るは落ちつつ波の上驚きて飛び、時に消え、時に明り、いよいよに暗く恐れて、いよいよに青に染そまりて、時わかず連れ啼く千鳥、へうへうと凍こゆる千鳥。いつまでかまた全く迷ふぞ、いつまでか飛びてやまぬぞ。

磯長しながの小ゆるぎの荒浪千鳥。荒浪の天うつ波の逆まきのとどろきが上、あああはれ、また、向き向きに、稻妻の青あおの脅おびえに連れ連れ亂る、啼き連れ亂る。

Handwritten text in a cursive script, possibly a signature or a name, oriented vertically on the left page of an open book. The text is written in dark ink on aged, yellowish paper.

大正十年冬、小田原近郊の散策より

冬の山岨

玉くしげ函根の山は短か日のことに短かく、み冬さり霜下り
来れば、午過ぎて日の目も知らず。向つべの山は明れど、こ
なたなる高山の岨、風寒く木の葉ちるのみ。早や早やも土は
凝りて、岩角の犬羊齒が下、枯れ枯れの雑木の根ごと、そく
そくと氷柱さがれり。ほきほきと氷柱掻き折り、かりかりと
噛みもて行けば、あな冷た、つめたかりけり。妻もまた冷た

よと云ふ。二人ゆく高崖の上、何の枝ぞ透きてこまかにつや
 黒の果をちらつかす、ふり仰ぎ透かし見すれば、高く澄む空
 の青きにひえびえといそぐ雲あり、また薄く消ゆるものあり。
 長尾鳥飛びて叫ぶに、行きなづみ蹲みて瞰れば、あな寒むや
 溪裾紅葉、鉾杉の暗みを出でてひと明り紅く燃えたり、その
 紅葉淵に映れり。人知らぬ寂びと静けさ。その下に飛び飛び
 の岩、岩もまた幽けかりけり。冬はなほ幽けかりけり。あな
 あはれ、樺の枯木行き行けば見る眼に聳え、瀧落ちてかげり
 陽迅し、あなあはれ、山の端薄陽。下見れば早や塔の澤、こ
 ちごちに湯の香煙りて、ちらちらと揺るる燈の見ゆ、海見え

て漁火つく見ゆ。この岨や馴れし山岨、遠く來し旅にもあら
 ね、さは急ぐ道にもあらず。我がどちや言にこそ出ね、今さ
 らの連れにもあらねば、ただ二人ほつりほつりと、日の暮は
 ほつりほつりと、また家路さし下るのみなり、降りるのみな
 り。

冬の日棚田

丘窪の冬の棚田はねもごろにうれしき棚田、寂び寂びて明るき棚田。たまさかに鶺鴒茶の刈田、小豆いろ、温かきいろ、うち濕る珈琲の土。下田にはいくつ稻村白金の笠めき和め、上畑は緑の縞目、わづかにも麥ぞ萌えたる。その畑に動く群禽つくづくと尾羽根振りては、また空へ飛び立ち翔る。あな冷た群の鶺鴒群れ飛べど日にもとまらず。いづこにか鶺鴒は叫べ

ど、風騒ぐけはひも聴かず。ただ低き日あたりの中、茅屋根の物静かなる、紫に寂び沈みたる、人氣なき庭にはあれど背戸ごとに柿の實も見ゆ。裏丘へのぼる小徑は孟宗の林に見えて、その藪の上の日向に蜜柑もぐ人もよく見ゆ、聲高になにか語りて燧石切る葺火も見ゆ。珍らかにいとど澄めばか、遠近の枯葉のくぬぎ、草もみぢ、耀く薄、おしなべてかくて安けし。あなあはれ、ここの丘窪、明るけど古さび棚田、うれしけど冬の日棚田、その空に翔る群禽、鶺鴒の薄黄の羽根のただ波うちて影もとまらず、影もとまらず。

落葉行

ひとりゆくこの山岨は、落葉のみ溜り濡れり。落葉踏み踏み
つつ行けば、いづく飛び鶺鴒高音うつ。かさこそり、櫟の枯葉
わがかたへまた聲立てぬ。日おもての草崖薄、その穂にも落
葉かかれり。草紅葉まだ温くけれど、その上にも落葉うごけ
り。向ひ山、こなたの小丘、見るものはみな枯木のみ。空ぐ
るま軋るを見れば、上岨を尻毛振る赤馬、ひようひようと吹

かれゆく馬子、みな寒き冬のものなり。溪の上の小茶屋の椅
子も紅葉積み、その溪かけて、はらはらと落葉ちりゆく。山
窪の幾むら藁屋、水ぐるま廻れる見れば、ほとほとに水も瘦
せたり。檉原ただ目に寒く、雨のごとちる落葉あり、よく見
ればいよいよ繁し、聲立てていよいよ寂し。ほうほうと立て
る雑木の岨路ゆき、別れ徑ゆき、當處さへ果てはわかねど、
風のまま歩みのままに、行き行けばただ落葉なり、前うしろ
ただ落葉なり、かさこそり、また、はらはらと、空にも地にも
も聲ばかりして。

落葉吟

かうかうと照る月ながら、雨のごと飛ぶ落葉かな。ああ落葉、
その影見れば、秋も早や老いにたるらし。ああ落葉、その聲
きけば、おのづから冬か待たるる。身の老といふにはあらね、
おのれまた若しともなし。さやけさはかかる夜ながら、見の
惚れむ光にあらず、杉木立青きはあれど、隣山早やも瘦せた
り。枯れ枯れの木の枝を透きて、月はただ遠くあらはに、落

葉また風に吹かれて、へうへうとかぎりも知らず。いつの日
かまたと還らむ、いつの世か久しかりちふ。これやこの常な
かる世に年月の移らふまにま、我はあり、我はあれども、い
つ知らず後へのみ見る。なほなほも先ぞ氣遠き。而かもなほ
過ちにけり。つくづくと恥ぢ泣きにけり。さりとては諦も得
ず、また和の悟りをも見ね、ただすこしおのれ知るからただ
堪へて遜るのみ。ややややくかくてあるまで。寂しがり寂し
がるなる。ほとほとに堪へは得ぬとも、この寂びや、身もて
得し寂び、せめてものまだ頼りなる。ただたのみただ守るべ
き。ただひとり物も思はむ。さてひとり歩み歩まむ。あはれ

竹林の早暮

なる末の末かも、飛びちらふ落葉なるべき。落葉なら風のまかせよ。照る月に、北山風に、夜あらしに、影は影とし、はらはらと、ただ、はらはらと聲ばかりせよ。

七〇

俳句

おらもまたあなたまかせよ一茶坊

大正十一年の早春、小田原木兎の家の生活より

水仙と菊

窓掛の絹寒冷紗、硝子扉の外の短か日、短か日の斜めの陽ざし。窓掛の絹寒冷紗、その蔭の水仙と菊、鉢臺の薄玻璃の壺。今朝咲きし一重水仙、いつの日か挿しし寒菊。冷たくて白き水仙、やや温く黄なる寒菊。水仙の青の葉は張り、寒菊の葉は半ば枯る。水仙は水仙の影、寒菊は寒菊の影、その壺も玻璃の影して、栗色の砂壁に在り。硝子透き、窓掛を透き、斜

め陽の明るみぎりには、冬もなほいつくしく見ゆ、頼無き影と
 しも無し、柔かく親しかりけり。薄玻璃の影もゆらげり。妻
 とゐる二階の書齋、午過ぎはただ閑かなり。湯沸のふき立つ
 る湯氣、わがふかす煙草のけむり、また揺れてその壁にあり
 妻の影、わが影もあり。水仙と寒菊の花、現身にうつつに観
 れば、まこと今あはれなりけり。水仙と寒菊の影、現なく映
 らふ觀れば、現なし、寂しかりけり。近々と啼き翔る鶉、遠
 々とひびく浪の音。誰か世を常なしと云ふ、久しとも愛しと
 も思へ。山に住み世に離るとも、全く世を厭ふにあらず、五
 月蠅やと、切に思へど、人來ねはたづきも知らず、妻と我、

二人居れども、かくてあれども、時をりはただ寂しくて、眼
 を見合せぬ。

聽けよ妻ふるものあり

七六

聽けよ、妻、ふるものあり。かすかにもふるものあり。
初夜過ぎて夜の幽けさとやなりけらし。ふりいでにけり。何
かしらふりいでにけり。聲のして、ふりまさるなり。雨なら
し。いな、雪ならし。雪なりし。雪ならば初の雪なる。よく
ふりぬ。さてもめづらにふる雪のよくこそはふれ、ふりいで
にけれ。さらさらと、また音たてて、しづかなり、ただ深む

なり。聽けよ、妻、そのふる雪の、満ち満ちて、ただこの闇
に、舞ひ深むなり、ふりつもるなり。

俳句

たまさかに浪の音して夜の雪なり

七七

元旦の夜のこと

あな疎忽、吐息いでたり。氣にかけそ、何といふ事もあらぬを。また妻よ、焙じてむ玄米の茶を。來む春の話、水仙の話、やがて生れむ子のことなども話してむ。元旦のこの夜の深さ、山住の我らなるゆるゑ、いついつとかはりは無けど、今日はまたとりわけて、よろしかりけり。全く今しづかなりけり。今さらに何をかや云ふ。この夜さのこの安けさは神ぞただ守り

ますべき。心ゆくうれしさの中、我はただ詩を思ふなる。汝また差しのぞくなる。しづかなり、ただあはれなり。筆動く音のみぞする。身じろきの、息のみぞする。さてあらば夜も明けぬべし。あれ聽けよ、鶏啼くらしき。また聽けよ、浪の音なる。二人ただかくて起きゐて、まこと今ただ二人なる。二人なるいのちの息の、おのづから觸れかよふかな。親しくもゆき通ふかな。蜜柑なと一つむきてむ。近々と火にむかひるむ。またすこし炭つぎ足して、さて待たむ、二日の朝の海原の紅き日の出を。

露の臺

新らしき露の臺かな。珍らしき苦き香ぞする。その露の臺、
一つ刺し、二つ刺し、竹の小串に三つ刺して、さて味噌つけ
て、火に焼きて、あな苦さよと一つ食べ、あなうまさよと二
つ食べ、あないつくしと三つ食べて、さてさびしやと我ゐた
り。春さきの、あは雪の、消なば消ぬかの、聲聴きてけり、
そのしばらくは。

竹林の早春

わが庵の竹の林に、こぬか雨今朝も濡れり。春さきのこぬか
雨なり。ふるとしも見えぬ雨なり。こぬか雨笹にこもりて、
香炷けば香もしめりて、事もなし、ただ明るけし。こまごま
と濡れかかるのみ、縹緲と煙曳くのみ。しづかなり、ただ安
らなり。顔出して、つくづく居れば、笹子啼き、目白寄り來
る、笹葉揺り揺りてまた去る。散りたまる去年の枯葉も、寂

しけど寒しともなみ、何かしら萌ゆる緑の、春は早や竹の根
にあり。よき濕りかくて濕らば、竹煮草、葛、路の臺やや
やにすすろき出でむ。髭長の藪の菫、莖などやがて咲くべ
し。松風の聲は沈めど、常ならぬさびしさならず。裏岨の
ほりくだりに、ほつほつと通る馬さへ、時をりは青きつけつ
つ、聲高の人の話も、濡れながら行けば親しよ。静こころ香
をつぎつつ、さて、今日もうら安くこそ。こぬか雨ふるがこ
とくに、こまごまといつくしみてむ春さきの我の思を。

ころころ蛙の歌

春さきのころころ蛙、一つ鳴き、二つ鳴き、ころころと後續
け鳴き、ふと鳴き止み、くぐみ鳴き、また急に湧きかへり鳴
く。いよいよに聲合せ鳴く。近き田のころころ蛙、よく聴け
ば聲變り鳴く。聲變り、一つ一つに、あなをかし、鳴けるさ
ま見ゆ。あちら向きこちら向き、飛び飛びて、また水くぐり、
うちひそみ、頬をふくらかし、鳴き鳴ける咽喉のさま見ゆ。

あなをかき、近田の蛙、さみどりの根芹か濕る、塗畔かまだ
 新らしき。雨もよひ雨よぶ聲の、寒けども寒しともなし、寂
 しけどなにか笑へり。友よびてまた鳴く蛙、遠田にも遙かど
 よもす。あなあはれ、遠田の蛙、また聽けば、遠く隔てて、
 夜の闇の瀬の音隔てて、いや離りうち霞み鳴く。また寄せて
 近まさり鳴く。遠つ浪邊に寄すること、遠つ風吹き寄するご
 と、その聲は夜空つたひて、いよいよに近く響きて、さて絶
 えて、また続け鳴く。近き田もまた競ひ湧く。初夜過ぎてま
 た後夜ふけて、なほなほにどよもす聲の、おそらくは夜の明
 くるまで。萌黄月、月の圓暈、遠近の薄き飛び雲、濡れ濡れ

てちろめく星の、糠星のかげ白むまで。ころころと、またこ
 ろころと、夜もすがら、夜をただ一夜、春さきのをさな蛙が、
 聲かざり、また聲かざり、ここたく鳴くも。

二
之
枯
る
木
の
次

大正五年、葛飾小岩の紫煙草舎の生活より。
但し、鳥の啼くこゑ外一篇は當時の作。
その他は十年春作。

立枯並木の歌

霜ふかき野川の堰むせき、あはれよと今朝見けさに來れば、いつとなく
水量みづ涸れつつ、隙間なく氷張りけり。枯すすき、土堤どての枯草、
凍りつき白くきびしく、兩側もちがはの立枯並木たちがれなみき、いよいよに白くさ
びしく、雪空の薄墨色うすすみにこまごまと梢明りこすあかり、下空したぞらの小枝こえだのほ
そ枝立ちつづき、見れども飽かず、入り交り網目あみめして透く。
兩側もちがはの立枯並木、下見しもれば一側並木ひとがはなみき、時をりにとまる鴉からすもそ

九〇
の枝の霜にすぼまり、渡り鳥ちらばる鳥もその空に薄煙立つ。
風吹けばかすかに揺れ、雪ふればいよしづもり、さむざむ
と時雨るる夜半も、月あかり落ちゆく曉も、消なんとし消た
ずかすかに、現にもうつしけなくも、ただ寂し薄し果敢なし。
霜ふかき野川の堰、今朝もまた氷張りけり。その川の雨側つ
づき、隙間なく枯木つづけり。あなあはれ立枯並木。

潮來の入江

すな真菰、真菰が中に菖蒲さく潮來の入江、はるばると我が
求め來れば、そのかみの潮來の出嶋荒れ果てて今は冬なる。
旅やどり、消ゆるばかりに、一夜寝て寝ざめて見れば、霜し
ろし水の邊の柳、何一つ音もこそせね、薄墨の空の霧らひに
ただ白く枝垂れ深めり。枝垂れつつ水にとどけり。また白き
葦にとどけり。そのかげの小さき苦舟、いよいよに霜の凍り

九二
て、こまごまと霜の凍りて、舟縁も苦も真白く、櫓も梶も絶えて真白し。つくづくと眺めてあれば、閑かなる入江のさまや、苦舟にのぼる煙も、風無けば直ぐに一すぢ、ほそぼそとしばしのぼれり。廣重のその繪の煙、目に見れば浮世なりけり。あなあはれ水の邊の柳、あなあはれかかりの小舟、寂しとも寂しとも見れ。折からや苦をはね出て、舟縁の霜にそびえて、この朝の紅き鶏冠の雄の鶏が、早やかうかうと啼き出けるかも。

夜の雪

この夜さも雪はふりけり。かの夜さも雪はふりけり。その聲や靈も消ぬかに、降り積り、消ぬる白雪。白雪のふれば幽かに、たまゆらは澄みてありけど、白雪の消ぬるたまゆら、ほのかなるまとも消にけり。白雪のはかな心地の、我身にも遣るかたもなし。

鳥の啼くこゑ

九四

かおかおと啼くは鴉、びよびよと啼くは雛鶏、雀子はちゆち
ゆとさへづり、子を思ふ焼野の雉子、けんけんと夜も高音う
つ。現身の鳥の啼く音の、なぞもかく物あはれなる。天わた
る秋の雁金、春くれば遠き雲井にかりかりと消えて跡なし。

宋の女玉

大正五年葛飾小岩の生活より、十年春作。

アツシジの聖の歌

アツシジの聖ひじりフランチェスコの物語。フランチェスコは雀子を愛なしみ給ひき。雀子も慕たひまつりき。現身うしみの人にてませば、かの人も亦また、人のごと寂さびしくましき。寂さびしくて貧うしくましき。寂さびしくて貧うしきが故、遜へりたり、常に悲かなしくましき。いといと悲かなしくましき。それ故に、末途すゑに神を知らしき。その聖道のべに立たしめたまへば、雀子は御後みあとへ慕たひ、御手みてにの

り、肩にとまりき。さてちゆんちゆんと鳴いたりき。あなあはれ、雀子よとて雀子を撫でさすり、掻い撫でさすり、僞りなせそ、むさぼりそよ、おのづからなれ、正しく、直く、常童にて、天地の神ごころにも通へとぞ、悲しかれよと宣りまじき。御法説かじき。雀子を愛しみたまへば、雀子も慕ひまつりき。雀子にも解きやすき御言葉なれば、雀子も御言葉をろがみまつり、羽根をすり頭さげてき。またちゆんちゆんと鳴いたりき。さて徒に物を欲り、浮かれ、たばかり、盗まざりけり。僞らず、安らなりけり。かかる時、草原に露満ちて、蟲鳴きそそり、飾り無き野の花のかをりも吹く風の涼し

きままに、空は圓く澄みわたりて、また、塵ひとつだにとどめざりければ、聖の御頭かすかに後光をはなち、差しのべたまへる兩つの御手の十の御指は皆輝きて、その掌の雀子さへも光るばかりに喜び羽うち、御前に輪を成す雀のむれもみなみな雀の後光をかすかに立ててぞ啼き恍惚遊ぶ。フランチェスコは御空を仰ぎて、主よ、主の奴僕はかくありぬ、かく貧しきが故にこそ世のあらゆるもろもろの御寶をも却つて主のごとく、この身ひとつに保ちまつる、ありがたやハレルヤとぞ、涙ながして讃め禱りませば、雀もともに、ハレルヤ、ハレルヤと、眼を上げ涙ながして御空を仰ぐ。現身の人の聖と

現身うつしがの鳥の雀と、雀とフランチェスコと、朝夕に常かくなり
 き。あなあはれ、世よの常つねの事にはあらずよ。温かき御心ゆゑ
 ぞ、大きな博ひら々御心もてぞ、ありとある愛あしみたまへば、
 御心は神にもいたり、雀にも通ひましけむ。あなあはれ、人
 のこの世うつつの現まにも、かかる聖ひじりのましまししものか。

米の白玉

一

ましら玉、しら玉あはれ。白玉の米、玉の米、米の玉あはれ。
 そを一粒、また二粒、三粒、四粒と数ふれば白玉あはれ。う
 すき瀬戸白の小皿に、幾すくひすくへどあはれ、かそかそと
 聲ばかりして、ころころと音ばかりして、搔き寄せて十粒に

足らず、ひろへれど十粒を出でず、かそかそところころと、
 聲するは、空しき櫃の、空櫃びなびらの米櫃の底。ましら玉、しら玉
 あはれ。白玉の米、玉の米、米の玉あはれ。

二

ましら玉、しら玉あはれ。白玉の米、玉の米、米の玉あはれ。
 そを一粒、また二粒、三粒、四粒と數ふれば白玉あはれ。搔
 きよせて十粒に足らず、ひろへれど十粒を出でず。今は早や
 我は饑ゑなむを、我妻もかつゑはてむを、ましら玉しら玉あ

はれ。さは云へど米のしら玉、貧しとてすべな白玉、その玉
 を雀子も欲れ、ひもじきは誰もひとつよ、雀子も來ては覗き、
 饑ゑて鳴き、鳴きては遊び、遊びては求食あさり、求食あさるを、米
 の玉あはれ。雀來よ、雀來よ來よ、いとせめて啄つめよこの米、
 ひもじくばふふめこの米、汝ならが饑ゑずしあらば、うまから
 ば、うれしくかはゆく鳴くならば、白玉あはれ。わがどちは
 この我は、わが妻とても、今さらに食あさずともよし、食あさず
 ともよし。ましら玉、しら玉あはれ。しら玉の米、玉の米、
 米の玉あはれ。

ましら玉、しら玉あはれ。しら玉の米、玉の米、米の玉あはれ。絶ち絶ちて幾日をか経し、餓ゑ餓ゑて幾夜をか経し、この我や生きて貧しく、生きんすべせんすべたにもなきものを、米の玉、しら玉あはれ。はづかなるあるかなきかの金を得て、かきよせて、市のちまたに米買ふと破れし囊を手にかけて、これに米、すこし賜べよと乞ひのめば、入れて賜ひけり、さらさらと入れて賜ひけり。うれしくて走り出づれば金賜べと人の驚く。忘れたり、ゆるされませと赤らみて、金置きてま

三

た駈け出れば、うしろより米はとおらぶ。驚きて、また忘れたり、ゆるされと、此度はしかと、しら玉の米の囊をひきかつきかかへて戻る。米の玉、しら玉あはれ。現なるこれや現か、ゆめならず、現なりけり。その現、現なるこそうれしかりけれ。しら玉の、ましら玉の、ましら玉の、しら玉あはれ。しら玉の米、玉の米、米の玉あはれ。

犬と鴉

一

犬の子に白き飯皿、子鴉に青き飯皿、朝夕に同じ飯盛り、おのがじし食せよと呼べば、犬の子は己が飯惜しと、子鴉は己が飯惜しと、犬の子は子鴉が飯、子鴉は犬の子が飯、ひたぶるに奪ひ取らむと、ひたぶるに盗み食さむと、ただ啼きつ吼

えつ噛みつす。己が飯はすでにあまるを。己が飯に足りりと
はせで、なじかさは他の物欲る、なじかさはよその物欲る。
同じことかはゆきものを、同じこと飯は盛れるを。犬の子よ、
子鴉よ、あはれ。

二

あなあはれ、みぎりひだりに、子鴉と犬の子と寄る。此方向
けば子鴉あはれ、其方向けば犬の子あはれ。二方の鳥よ獸よ。
ひとしけくかはゆきものを、同じけくかなしきものを、いづ

れ別きいづれ隔てむ。かにかくに兩手あげつつかろく叩き、
 撫でてあやせば、羽根はたき尻尾ふりきる。ひもじきかさ
 ば食せよと、一つ掌に牛の乳盛れば、子鴉はみぎりより来て、
 犬の子は左よりきて、嘴と口つつき合せて、啄き嘗め、啄き
 嘗めつす。また、そねみ、惜み、にくまず。あなあはれ空飛
 ぶ鳥と、地を匍ふ家の畜と、いつのまにかくや馴れけむ、な
 じかさはかくも親しき。これやこの人の我が掌に相睦み和む
 を見れば、今さらに喜ぶ見れば、この我や、みぎりひだりに
 とみかう見涙しながら。

六重と母

大正二年—三年、麻布の生活より。

麻布山

麻布山浅く霞みて、春はまだ寂し御寺に、母と我が詣でに來れば、日あたりには子供つどひて、風をあげ獨樂を廻せり。立ちとまり眺めてあれば、思ほゆる我がかぶる髪。ほほゑみて母を仰げば、母もまたほほと笑ませり。けだしくや我がかぶる髪、母もまた忍ばすらむか。我が母は何も宣らさね、子の我も何もきこえね、かかる日のかかる春べに、うつつなく遊

ぶ子供を見てあれば涙しながる。

童と母

垂乳根の母の垂乳に、おしすがり泣きし子ゆゑに、いまもなほ我を童とおぼすらむ、ああ我が母は、天つ日の光もわすれ現身の色に溺れて、酒みづきたづきも知らず、酔ひ疲れ歸りし我を、酒のまばいたたくがほど、悲しくもそこなはぬほど、酔うたらば早うやすめと、かき抱き枕あてがひ、衾かけ足をくるみて、裾おさへかろくたたかす、裾おさへかろくたたか

す、垂乳根の母を思へば泣かざらめやも。

13
の
か
き
し
り

How

大正二年、麻布にて。

ほのかなるもの

ゆめはうつつにあらざりき。うつつはゆめよりなほいとし。
まぼろしよりも甲斐なきはなし。

幽かなるこそすべなけれ。美しきものみなもろし。尊きもの
はさらにも云はず。

ひとのいのちはいとせめて、日の光こそすべなけれ。麗かな
るこそなほ果敢な。星、月、そよかせ、うすぐものゆくにま
かする空なれども。

ふりそそぐものみなあはれなり。雨、雪、霰、雹に突、それ
さへたちまち消えうせぬ。

土に置く霜、露のたま、靄、霧、霞、宵の稻づま、ほのかな
れども水陽炎のそれさへ頼むに足るものなし。

煙こそあはれなれども、捉へられねばよしもなし。山家にゆ
けど、野にゆけども、水のながれを堰くすべもなや。

ちちろと歎く蓑蟲も、螢の尻もみな幽けし、なまじ寝鳥の寝
もやらぬ春のこころの愁はしさよ。

色ならば、利休鼠か、水あさぎ、黄は薄くとも温かければ、
卵いろとも人のいふ。

水藻、ヒヤシンスの根、海には薔薇のり、風味あやしき蓴菜

は濁りに濁りし沼に咲く、なまじ清水に魚も住まず。

花と云へば、風鈴草、高山の蟲取堇、蒜の花。一輪咲いたが一輪草、二輪咲くのが二輪草、まことの花を知る人もなし。

葉は山椒の葉、アスパロガス。蔓は豌豆、藤かづら。芥子に恨みはなけれども、その葉ゆるこそ香も青く、ひとに未練はなけれども、思ひ出のみに身はほそる。

あはれなるもの、木の梢。細やかなるもの、竹の枝、菅の根

の根のその根のほそ毛、絹絲、うどんげ、人參の髯。

はろかなるもの、山の路。疲れていそぐは秋の鳥、とまるものなき空なればこそ、こがれあこがれわたるなれ。玻璃器のなかの目高さへ、それと知りなば果敢なみやせん。

巢にあるものはその巢をはなれ、住家なきもの家をさがす。栗鼠は野山に日を暮らし、巡禮しはしもとどまらず。殻を負ひたる蝸牛はいつまで殻を負うてゆくらむ。

かへり見らるる船のみち、背後の花火、すれちがひたる麝香
連理の草花の籠、ひとの襟あしみなほのかなれ。

笛の音の類、朝立ちの驛路の鈴、訪ふ人もなき隠れ家のべる
の鉦のほのかに白き、小夜ふけてきくりんのたま。

影はなによりまた寂し。踊子のかげ、扇のかげ、動く兔の紫
のかげ、花瓶のかげ、皿に轉がる林檎のかげはセザンヌ翁を
も泣かすらむ。

夏はリキュール、日曜の朝麥藁つけて吸ふがよし。熱き紅茶
は春のくれ、雪のふる日はアイスクリーム、秋ふけて立つる
日本茶、利休ならねどなほさら寂し。

味氣なきは折ふしの移りかはり、祭ののち、時花歌のすぐ廢
れゆく。活動寫眞の醉漢の絹帽に鳴くこほろぎ。

さらに冷たきもの、眞珠、鏡、水銀のたま、二枚わかれし蛇
の舌、華魁の眸。

しみじみと身に染みるもの、油、香水、痒ゆきところに手のとどく人が梳櫛。こぼれ落ちるものは頭垢と涙。湧きいづるものは泉、乳、虱、接吻のあとの嘔び、紅き薔薇の蟲、白蟻。

誤ち易きは、人のみち、算盤の珠。迷ひ易きは、女衞の口、戀のみち、謎、手品、本郷の西片町、ほればれと惚れてたまされたるかなし。

忘れがたきは薄なさけ。一に好色、二に酒の味、三にさんげの歌枕。わが思ふ人ありやなしやと問ふまでもなし都鳥、忘

れな草の忘れられたるなほいとし。

浅くとも清きながれのかきつばた。偽れる、薄く澄ませる、また寂し。まことなきものげに寂し。まことあるものなほ寂し。しんじつ一人は堪へがたし。人と生れしなほ切なけれ。

思ひまはせばみな切な、貧しきもの、世に疎きもの、哀れなるもの、ひもじきもの、乏しく、寒く、物足りぬ、果敢なく、味氣なく、よりどころなく。

頼みなきもの、捉へがたく、表現はしがたく、口にしがたく、
聴きわきがたく、忘れ易く、常なく、かよわなるもの、詮す
れば佛ならねどこの世は寂し。

まんまろきもの、輪のごときもの、いつまでも相逢はず平^な行
びゆくもの、また廻^まるもの、はじめなく終りなきもの、煙る
もの、消^けなば消^けぬかに纏れゆくものみなあはれ。

藝は永く命みじかし、とは云ふものの、滅び易きはうき世の
ならひ。うたも、しらべも、いろどりもゆめのまたゆめ。

うつつをゆめともおもはねど、うつつはゆめよりなほ果敢な、
悲しければぞなほ果敢な、幻よりもなほ果敢な。



刷印日五十二月七年一十正大
行發日一月八年一十正大

秋白原北者作著

者表代スルア社會賣合
雄鐵原北者行發
號五地新町茶屋座區區京市京東

(所刷印認番一)
郎太寶雲出者刷印
三ノ一路小川今區區神市京東

川小本製

發行所

東京市京橋區
銀座尾張町

會合

アルス

電話銀座二一八九三番
振替東京二四八八番

詩集觀相の秋

定價壹圓八拾錢

民謡集 日本 の 笛 北原白秋氏 著 及 装 畫

詩壇の巨匠白秋氏の新民謡集成

詩壇の巨匠白秋氏の新民謡集成。これ民衆の言葉をして民衆の生活、感情を歌へる眞の民衆の詩也。南風の港に鮎を追ふ素朴なる漁夫の唄。月光の濱に濡れて立つ海女の戀髪は背の丈、油は椿、磯燕飛ぶ八丈大島の鄙唄、月は桃色宵の月、マンドリンの爪弾を偲ぶべき輕快なる都會情調。博多帯しめ筑前絞、悽艶を極むる博多古調、南國の情熱、雪と落葉松、北國の驛路に咽び泣くが如き追分の哀愁等悉く歌ふべく誦すべし。今や民謡隆興の秋にあたり白秋氏の新著まさに太陽の如く出でたり。

内容概目

| | |
|-------|------|
| 南國の港 | 九十五章 |
| 南國の日和 | 二十八章 |
| 椿の花 | 九十二章 |
| パパヤの虹 | 十七章 |
| 風 | 三十七章 |
| 紫まつげ | 三十二章 |
| 蟹の味 | 三十七章 |
| 雪の焔 | 十九章 |
| 草の瓜 | 十六章 |
| 別れの霜 | 四十一章 |
| 桑の葉 | 十三章 |

四六判羽二重装箱入特製極美本・定價貳圓八拾錢 送料十八錢

白秋詩集 全二卷

日本詩壇に不滅の光輝を放つ白秋氏の全集詩集完

明治大正の詩歌を代表する巨匠白秋氏の全詩集成。收むる處純情涙を流すべき小唄あり、輕快歌ふべき民謡あり、天真自ら成せる童謡あり、法悦光明の歡樂境地を歌へる短唱小曲あり、幽玄深遠なる象徴詩あり、印象の筆觸鮮らしき景物詩あり、自由奔放なる散文詩あり、雄揮壯大絢爛を極むる長篇詩あり各種の詩風交錯して深然微妙の一大交響樂を形成し、詩壇嘗て見ざるの壯觀を呈す。本集二卷、通卷一千三百頁、詩數六百有餘篇、日本詩壇永遠不滅の金字塔たるべき白秋氏の全詩集は一先づ現在に至る全作品を網羅し茲に第一期の完成を告げたり。

第一卷

青燈集 (新作小唄、民謡等)
赤い鳥小島 (童謡集)
大悲集 (眞珠抄、白金の獨樂等)
如の祭 (三崎詩集)
雪と花火 (景物詩)

第二卷

邪宗門 (象徴詩集)
思ひ出 (抒情小曲集)
朱泥の馬 (長篇詩集)
補遺

中判箱入特製美本 定價各冊貳圓八拾錢 書留送料各冊拾七錢

歌集 雀の卵 北原白秋氏著

藝術の妙歌極此悉卷
術の詩致の極此悉卷
一に

別刷挿畫十七葉扉四葉・四六大判箱入特製美本

本書稿を起して八年、一度近刊を傳へられ火の如き翹望を受けてより更に六年、今や氏が畢生の大事業たる本書は茲に渾成完璧の名著として上梓さる。實に本書は氏が藝術の最高境地を示すものにして、その自然觀照は氏一流の雋俊なる直覺と清新なる感覺官能を徹して深く生命の實相に滲透し遂にかの東洋藝術の精髓たる眞の傳神、眞の象徴の秘奥に超達す。その表現は一視一線一語直ちに自然の生命に迫り、生を活すの妙機に參入し一字を拾ふに五年、一句を得るに七年の辛酸を経眞に彫心鑿骨の苦心を以て最終の的確と精緻を極む、氏曰く『余があらゆる詩歌は本卷の境界に臻るべき苦行の道程に過ぎず』と『雀の卵』遂に出で、東洋藝術界に眞純不二の巨光を放つ。

著者裝幀及挿畫

定價參圓八拾錢・書留送料貳拾七錢

北原白秋氏著 抒情小詩 わすれなぐさ

定價壹圓八拾錢
送料拾參錢

北原白秋氏著 白秋小唄集

定價壹圓八拾錢
送料拾參錢

北原白秋氏著 繪入童謡 とんぼの眼玉

定價壹圓九拾錢
送料拾五錢

北原白秋氏著 繪入童謡 兎の電報

定價壹圓九拾錢
送料拾五錢

北原白秋氏著 英國童謡 まごのあ・ぐ・うす

定價貳圓八拾錢
送料拾七錢

北原白秋氏著 繪入童謡 祭の笛

定價貳圓八拾錢
送料拾七錢

三木露風氏著 繪入童謡 眞珠島

定價貳圓八拾錢
送料拾七錢

三木露風氏著 象徴詩集

定價貳圓八拾錢
送料拾八錢

日夏耿之介氏著 詩集 轉身の頌

定價貳圓五拾錢
送料拾七錢

室生犀星氏著 室生犀星詩選

定價貳圓貳拾錢
送料拾七錢

萩原朔太郎氏著 詩集 月に吠える

定價貳圓五拾錢
送料拾七錢

三木露風氏著 抒情小曲 生と戀

定價壹圓八拾錢
送料拾參錢

日夏耿之介氏著 詩集 黑衣聖母

定價貳圓五拾錢
送料拾七錢

厨川白村氏著 英詩選釋

定價貳圓八拾錢
送料拾七錢

書樂音のスルア

| | | | | | | |
|---|---|--|---|---|--|--|
| 成田爲三氏曲 <small>童謡 樂譜</small> 仲よしこよし 定價 壹圓 送料 拾壹錢 | 成田爲三氏曲 <small>童謡 樂譜</small> ちんころ兵隊 定價 壹圓 送料 拾壹錢 | 弘田龍太郎氏曲 <small>童謡 樂譜</small> ほうほう螢 定價 壹圓八拾錢 送料 拾壹錢 | 小松耕輔氏曲 <small>小唄 樂譜</small> 銀の胡弓 定價 壹圓 送料 拾壹錢 | 小松耕輔氏曲 <small>小唄 樂譜</small> 小鳥の唄 定價 壹圓 送料 拾壹錢 | 小松耕輔氏曲 <small>小唄 樂譜</small> 象牙の笛 定價 壹圓八拾錢 送料 拾參錢 | 山田耕作氏曲 <small>小唄 樂譜</small> アイヤンの歌 定價 貳圓五拾錢 送料 拾七錢 |
|---|---|--|---|---|--|--|

| | | | | | | |
|--------------------------------------|--|---|--|---|---|-----------------------------------|
| 石原純氏著 歌集 燿日 定價 貳圓八拾錢 送料 拾八錢 | 北原白秋氏著 歌集 雲母集 定價 貳圓參拾錢 送料 拾七錢 | 與謝野晶子氏著 歌集 太陽と薔薇 定價 貳圓五拾錢 送料 拾五錢 | 北原白秋氏編 歌集 第二木馬集 定價 壹圓八拾錢 送料 拾五錢 | 北原白秋氏著 歌話 洗心雜話 定價 壹圓八拾錢 送料 拾五錢 | 古泉千樞氏編 <small>子規歌論集</small> 竹里歌話 定價 貳圓八拾錢 送料 拾八錢 | 北原白秋氏著 白秋小品 定價 貳圓 送料 拾七錢 |
|--------------------------------------|--|---|--|---|---|-----------------------------------|

アスルの音楽書

| | | |
|---------|------------|------------------|
| 前田三男氏著 | 音樂の常識 | 定價貳圓貳拾錢 送料拾七錢 |
| 小松耕輔氏著 | 西洋音樂の知識 | 定價貳圓六拾錢 送料拾七錢 |
| 山田源一郎氏著 | 樂譜の讀み方 | 定價壹圓參拾錢 送料拾壹錢 |
| 山田源一郎氏著 | ヴァイオリンの彈き方 | 定價壹圓參拾錢 送料拾壹錢 |
| 前田春聲氏著 | 泰西の歌曲と其作家 | 定價貳圓五拾錢 送料拾七錢 |
| 山田耕作氏著 | 近代舞踊の烽火 | 定價壹圓四拾錢 送料拾壹錢 |
| 二見孝平氏著 | アンナ、パフロア | 近刊 |

